

BACTERIAL DIAGNOSIS AND MONITORING IN PERIODONTAL DISEASES

雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	13
号	1
ページ	147
発行年	1994-06-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00007940/

〔特別講演要旨〕

BACTERIAL DIAGNOSIS AND MONITORING
IN PERIODONTAL DISEASES

Prof. P. Baehni

University of Geneva, Switzerland

歯周疾患は、宿主-細菌間の相互作用の結果、口腔常在嫌気性菌による複合感染により生じる。本疾患ではrisk markerと考えられるある種の細菌は、検出頻度が高く、宿主-寄生関係の動態をよく再現している可能性がある。細菌学的分析は疾患の危険度を定量することはできないが、LJPや急性炎症の診断、および難治性歯周疾患の治療方針決定に用いられる。

今日、歯周疾患の診断や治療法の選択および治療終了の判断に細菌学的手法を用いる歯科医が増えている。歯周疾患原因菌同定のための方法として、検鏡や、培養、免疫学的な測定、核酸検出法および酵素試験がある。各種方法には一長一短がある。検鏡およびchair-sideでの酵素試験は簡潔かつ迅速で安価である。しかし検出する原因菌数が少ない。免疫学的およびDNA assayは正確であり、chair-sideでも応用できるが、標的細菌のみの検出に限られてい

る。培養は、通常の原因菌や特異な菌およびこれらの非細菌的感受性の同定が可能であるが、研究室との提携が必要である。

risk markersには、*Actinobacillus actinomycetemcomitans*, *Porphyromonas gingivalis*, およびスピロヘータがあり、*Prevotella intermedia*, *Bacteroides forsythus*, *Fusobacterium nucleatum*, *Campylobacter rectus*, *Peptostreptococcus micros*, その他同定されていない細菌も考えられている。

今回の講演では、歯周炎を診断する様々な方法を評価、検討し、また、歯周疾患患者をスクリーニングするための広汎な疫学的研究より得られた結果を要約した。さらに、細菌のモニタリング法（なぜ用いるか、いつ用いるか）について検討し、以上の問題について、ケースレポートを交えて提示した。

（担当：歯科保存学 I，小鷲悠典）